

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	大嘗祭について
Author(s)	カテリーヌ ヴァンシンテジャン,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1991 : 67 - 76
Issue Date	1992-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039305
Right	
Relation	



大嘗祭について

カテリーヌ ヴァンシンテジャン

大辞林によると、大嘗祭の定義は「天皇が即位後、初めて新穀を天照大神および天神地祇に供え自らも食する、一代一度の新嘗の祭事。」である。

どこにでもいる人にとって、大嘗祭は遠い観念を思い出させそうだが、あまりその課題を深く究明したくなさそうである。実は大嘗祭に夢中になる者は民族学者、法学者、宗教学者などの専門家とかその行事を反対している者しかないであろう。しかし、昭和天皇死亡、それに明仁新天皇の即位の際、大嘗祭は再び今日的な問題になった。専門家の方は、新理論を作り、庶民の方は儀式に使う費用の支出に興味を持ち、そして反対している者は最後の奮起をおこなった。平成二年十一月に行なわれた大嘗祭は以前から問題を引きおこしている新憲法ではあるが、その中に新たな要因を生み出していった。たしかに、去年の大嘗祭は第二次大戦後にできた新憲法の下での初めての「大嘗祭」であった。新憲法は象徴天皇制や政教分離の原則を保証しながら、天皇の役割は不明で、ある理論が神格を得られるとさえ主張されるのである。

大嘗祭の紹介

大嘗祭を王権の継承という文脈で眺めると、一連の儀式の中の最終的な儀礼として位置づけられているわけである。最初はまず古い天皇が亡くなって新しい天皇が即時的に天皇の位を継承するための踐祚の儀式というのがあり、日をおいて、今度は踐祚をした新しい天皇が誕生したということ、内外に宣言する即位の礼とということが行なわれる。その即位の礼に引きついで行なわれるのが大嘗祭である。即位儀礼に属している儀式の中、一番不思議なのは大嘗祭であるということはいまでもない。なぜかというと、大嘗祭をめぐる神秘は天皇が主な儀式の間、ずっと一人でいるため、誰もその間で行なわれることを目撃できないのである。その儀礼は皇室が簡単だということに、元の意義がおそらく時代の流れで失われたからであろう。しかし、その意義についての理論は熱心に続けられてきたし、その理論も神秘が持続されている。

「大嘗祭」という名前は、持統天皇の即位の祭(673年)初めて使われたが、皇室祭祀の歴史家によると「大」の漢字は「新嘗祭」に加えられて、その根本的な価値を表現するためだったのである。律令体制ができあがった七世紀の段階で、踐祚・大嘗祭という方式が定まるわけである。踐祚があり、即位の礼があり、そしてそれを完全させる意義で大嘗

祭という宮中祭事が行なわれるようになったといったことであろうか。

一代一回行なわれる儀式で、天皇代の一番目の新嘗祭のことである。新嘗祭は神道の儀式で、天皇がその年のとれた新しい米を伊勢神宮に奉る祭りで、十月十七日におこなわれる。新嘗祭の場合では、天皇が神祇宮に代わったことも歴史上あったが、代嘗祭の方は摂政さえその天皇の代理を行なうことは決してできなかった。

では、代嘗祭そのものとは何であろうか。

嘗ては、準備の期間に天皇の蔽かなお浄めが挙行された。行列を構成した管理者も庶民も京都で流れる鴨川の側に着いてから儀式に参加した。大嘗祭直前、鎮魂祭という儀式も行なわれた。しかし、今の代嘗祭では川でのお浄めが廃止されると同時に、鎮魂祭での踊りは前に特別なあめのずえ神の子孫であると称している部が踊ったのに今、宮殿の乙女が演奏するという状態になった。

大嘗祭の日に、中心とされている悠紀殿・主基殿の儀は新天皇がお湯で身を最後に清めてから廻立殿という仮に建物の一部を出て、白い祭服を着て行列を従え、敷物を踏んで悠紀殿に入る。天皇は絶対に清めの状況にある。天皇の足は、前に払げていかれ、また後から巻かれていく葉薦のおかげで地面に触れることは一度もないわけである。悠紀殿で行なわれる典礼については、簡単な説明を宮内庁からもらう。

天皇が二番目の部屋まで進み、空いている畳の向こうに腰をかけてから、一連の皿が介添えに持ってこられ、空いている畳と天皇の間に置かれる。しばらく待った後、天皇は一枚ずつの皿から二、三口だけ食べて、皿をまた介添えに渡して出る。天皇が廻立殿に戻って、もう一回身を清めてから出て、主基殿で全く同じ行動を繰り返す。それを悠紀殿・主基殿の儀というのである。

大嘗宮での儀式が終わると、大嘗祭の後半分の大饗の儀が宮殿で開かれる。参列者を招いて開く直会に当たり、大嘗宮の儀で供えた酒などが振る舞われる。

大嘗祭の建物あるいは大嘗宮について

昭和の大嘗祭は1928年、史上最大の代嘗宮を建てて行なわれた。金融恐慌、第一次山東出兵の翌年、満州事変の三年前で、軍部の台頭の時代である。天皇は統治権の総覧者だった。大嘗祭の「器」となる悠紀殿・主基殿の大きさはその時代と政治状況とを正確に反映してきたように見える。そして今回、宮内庁は昭和の大嘗祭を前例とし、同じ大きさで代嘗宮を造ることをまず決めた。その代わり、柱などの材料を安いものに変え、工法の面で徹底して費用を削減する方針を決めた。外見さえ変わらなければ良い、と割り切ったのである。工事業者が隠れてやれば「手抜き」になるような方法が合理的に、大胆に採用された。そして、見た目にも堂々として豪華な代嘗宮ができ上がったのである。もう一つ議論されているのは悠紀殿と主基殿の原因と役割である。主な説明はモガリの儀と関係がある。

古代日本でのモガリという葬式は大嘗祭の両殿の原因として見れば、モガリとは死後そ

の人間の遺体を一定期間地上に安置することである。そのため、殯宮を建てられる。殯は霊と肉の分離が徐々に進行している中間的プロセスである。その長期間に様々な儀礼を挙行する。最終儀式は埋葬となる。悠紀殿と主基殿は死んだ天皇の遺体が置かれてある殯宮と王位の継承者がいる所に当たる。折口信夫の説ではその宮と大嘗宮の関係の可能性が表明される。目立ったのは、大半が大嘗祭の時とよく適合することである。しかし、史料が残る時代の中には、大嘗祭と葬式の儀が一緒に行なわれる時の跡形がない。従って、死んだ天皇の霊が新天皇に移るという理論は信用を失うが、両儀式が共に行なわれた時代があったと考えてもよい。その分離は中国の影響が強くなった時に起こったと思われる。

大嘗祭の略史

鎮魂祭との関係：

元々は、大嘗祭は冬至の直後に行なわれた。その選択は偶然ではない。古事記に載せた「洞窟」という神話は大嘗祭の直前行なわれた鎮魂祭の原因を説明する。その神話では天照大神が洞窟の中に身を隠したから、世界は暗くなった。洞窟から天照大神が出させるため、あめのずえ神が面白い踊りをして、それで、皆が笑うので、好奇心に駆けられて、天照大神が出、世界はまた明るくなるという神話である。鎮魂祭は十一月の中旬ごろに行なわれるが、それは冬至に対応する。

始めの大嘗祭の時代の状況：

持統天皇代から始まった大嘗祭は、中国の影響が日本の社会に強かった時に、擬古趣味の形で継承方式として作られたものである。従って、わざわざそんな形で保存されてきたと思えよう。それは中国の影響と対をなすため、日本の独創性を出張できる方法だったと言える。その時、中国文明が日本に対してそれほど強くなかったら、おそらく今の大嘗祭も存在しないかも知れない。天皇が着ている服、そして白酒と黒酒（老子の道教の要因）の使い以外、大嘗祭への中国か他の外国の寄与は、あまりない。

大嘗祭は間違いなく伝統的皇位継承儀式ではある。ただし、否応なしに、時代の政治権力や社会状況のそれぞれの影響を強く受けて、その伝統的な形式は変化し、全く行なわれなかった時期さえあった。室町時代半ば、文正元年に行なわれた後土御門天皇の大嘗会（大乘え）の後は二百十一年間中継、その間、九人の天皇は大嘗祭なしで、皇位を継承している。また、南北朝時代の南北の天皇たちが、挙式できなかったことはいうまでもない。江戸時代に入り、徳川五代将軍職についた綱吉が、それまでの弾圧的な対朝廷政策を融和策に転じると、朝廷側は猛烈に運動し、貞享四年（1687年）、東山天皇の時、ようやくの大嘗祭の再興にこぎつけた。その際、大嘗祭は再興されただけではなく、修復もおこなわ

(4)

れた。例えば、皇宮外の全部の儀式は廃止され、首都の大通りを盛大な行列で進む奉納特を持ってきた地方代表者も見えなくなった。

幕末、明治四年十一月東京で行なわれた大嘗祭も維新の時代に合わせた変更に力点がおかれたようである。明治から、グレゴリオ暦が採用された結果、転換を受けたのである。例えば、日本の建国記念日は二月十一日に定められたが、それは旧暦の660年朔日に当たるからである。では、大嘗祭の場合、旧暦によるの十一月の日付けは新暦の十一月に移り変わった。それで、冬至との一致が消えてしまった。

大嘗祭の明治維新の修復では、外国の影響もみられる。東京は首都なのに大嘗祭は京都で行なわれたことはどう説明すれば良いだろうか。西洋と同じレベルに着くのは大切な目的だったのはどの活動分野でも見られた。その時、ロシアに特に興味があったといわれるロシアのツアーはサン・ペテルスブルクに住んでいたのに、その即位儀礼は伝統的にモスクワで行なわれた。そのように、明治時代の大嘗祭はロシアの状態にならって行なわれた。

昨年の大嘗祭には東京が定められたのは、安全や住む所などの具体的な問題の結果だったということは間違いない。

大嘗祭をめぐる理論

「ルック・ジャパン」という雑誌の1990年九月の号に大嘗祭の記事がこのように序論されている。” This year, on the night of November 22, the new emperor will enter a specially-made building and wait for the descent of an ancestral god, with whom he will eat and stay the night--and achieve divinity. This is the Daijosai, a ceremony that has its origins in the dawn of the Japanese nation.” と英語で書いている。「天皇が祖先大神の降りを待って、降りてから一緒に召し上がって、夜を過ごす—それから、神格を達する。」という部分は非常に直接の口調でアプリアリを言外に一杯含めている。ところで、完全で、偏らない定義をあげるのは本当に難しいことである。なぜかというと秘儀の部分が行なわれるし、その代わりに理論過多が生まれたのである。

専門家の理論：

大嘗祭が神秘の中に浮いているため、典礼研究者が大嘗祭の深い意義にずっと大きな興味を持ってきた。シムド・加代が自らこう主張した「*タ-*のあるところに関心が集まり、また最も関心 が集まるべきところには*タ-*が設けられている」。

民族学者の柳田国男が言っていたように、「私も新穀の面、いわゆる大嘗祭と全国に秋の祭りとして行なわれる新嘗祭との関係を大切にして、農業の儀式として行なうと思うの

だ。」(1953「稲の産屋」第一冊)。しかし、旧暦が使われたとき、新穀の収穫の日と大嘗祭の日の間に、二カ月の違いがあつて、それは農業の面だけを考慮しては説明できない。悠紀殿と主基殿の内輪中央には、畳を重ねた寝床がしつらえられ、その上に掛け布団などが置かれてある。この意味をめぐって、熱い論争が未だ続いている。その事に気づき、それを基盤とする論理を作った初めての人は民族学者の折口信夫である。1929年の講演「大嘗祭の本義」で、天皇は八重畳の寝座で寝具にくるまり、天皇霊を身につけて「完全な天子」として再生されると言う、いわゆる真床覆衾論を発表している。真床覆衾という言葉は、『日本書紀』の天孫降臨神話に、天孫が真床覆衾に包まれて天下った、という形で出てくる。真床覆衾の「真」は美称で、床覆衾は、寝床で体を覆う掛け布団とかんがえてよいだろう。単純に神饌供進の儀を執り行なうだけなら、どうしてこのような大がかりな寝具の仕掛けが必要なのか。折口説は天皇代々に伝えられた特別の天皇の個性のない魂を持っていると言外に含めるようである。折口信夫の亜流が多かつたし、その説を受けて、様々な学説が出されていた。そのなかでも、代表的なのが、聖婚儀礼説と先帝同衾説である。ところが、去年の大嘗祭の際、折口説を反応する拡大な行動が出てきた。

今、強調されているのは「折口信夫自身、講演記録を収録した昭和五年刊行の「古代研究」に、自分の説は「仮説」であると、その後書きに書いています」ということである。伊勢の神主大学を含めて、保守的な部分からきた行動で、宮内庁の皇室典範もそれに賛成している。興味のある人は、宮内庁から折口説に反対する記事を渡してもらえる。その記事の内容は折口説をきちんと検証することではなく、持論を重ねるのも正しくない論拠をしめす。秘儀であつても典礼者がずっといるし、歴史上、そんな儀式の跡が全くないということは不可能である。なおかつ、天皇は子供であつた時代もあるが、この場合は関白が天皇の子孫のために儀式について日記に詳しいものものせている。こんな日記にも折口信夫が想像したような儀式(真床覆衾)については一言もない。折口説とその由来した説も単純な仮定として考慮されてきて、内部から崩壊していくに違いない。寝具の儀などの存在しないのだ、と言い切る意見も、今年になって出てきた。岡田荘司は『国学院雑誌』平成元年十二月号に「大嘗祭—真床覆衾—論と寝座の意味」という論文を発表し、文献記録に見るかぎり、そのような記事は見られない、と真つ向から否定され注目されている。岡田荘司はこう議論を展開する。

「一年間前に宮内庁書陵部が編纂した『図書寮叢書』に収められた崇徳天皇大嘗祭に、摂政藤原忠通が書いた『大嘗会卯日御記』という記録を読みました。これには、崇徳天皇は、なにしろ五歳ですから、悠紀殿の儀式の所作のときから、ねむたがって、むずかっている状態が書いてある。最も大事な神 供進も、摂政が介添えし、あとは忠通が代行している。廻立殿に戻ってくると、白河上皇が持つていて、天皇にお菓子をさしあげたりする。

むずかる天皇は抱かれたままで寝座に寝かされるようなことはしていない。廻立殿に帰

ってからようやくお休みされている。こんなにも詳細に書かれているのに、寢座の中で何の所作も行なわれていないということに対して疑問を持ったのである。采女との聖婚説などもあります、とにかく神饌祭具を運んだりする介添えの仕事が多く、手伝う忙しさからみて聖婚説も無理だと思われる。

また、祭儀に奉仕してきた吉田卜部氏の宮主の職掌について書いた「宮主秘事口伝」にも、大嘗祭の中で一番大事なのは神饌の供進であり、二条良基の記録を始めとして、一条兼良の「代始和抄」にも、神饌の供進が大事だということが書かれ、このことを「秘事口伝」としている。少なくとも平安時代から、以降の記録には、全くと言っていいほど、寢座での儀式について触れたものはない。

だから、寢座は皇祖天照大神が一夜休まれる見立ての座ではないだろうか。そういうことから、少なくとも大嘗祭の中心儀礼は神饌を供進して、天皇自らも頂き、皇祖と共食をされて、靈威を受けられ、みたまの恩顧（神から受ける恩徳と加護を受け、心一つにされ、皇位継承を認証される」ということである。

もう一つのアプローチは、天皇と天照大神の出会いそのものとは、何が例外的であるかということである。

現代では、天皇が大事な行事を行なうと、伊勢に行く。しかし、これは、明治時代から状態である。明治維新までに、天皇が伊勢へ行くことがあったが、伊勢神宮の神殿内に入った天皇は一人もない。この状態を追求するために、天皇制の原因からずっとさかのぼる必要がある。平安時代の本には、崇神天皇代までは、天皇と天照大神は一緒に同じ宮殿に住んでいたと書いてある。しかし、その時から（理由も載せていない）これを続けることはできなくなり、天照大神を伊勢に移すことが決められた。この分離のときから、伊勢への巡礼があったので、皇族の一人が選択され、斎宮として送られていたのである。大嘗祭は天皇・天照大神は直接に出会う唯一の機会であり、そして、注意深く見ると、大変危険をはらんでいる出会いである。というのは、出会いの直前のお浄め、直後の建物の崩れ、そしてまたそれぞれの家に帰ることなどである。

去年の大嘗祭をめぐる問題

法律の問題

昨年行なわれた明仁天皇の大嘗祭は象徴天皇制を定めた現憲法下で初めての大嘗祭だった。戦前の天皇の代替わりの儀式については、大日本帝国憲法とならぶ最高法規である「皇室典範」がその大略を定め、その下位法規である「皇室喪儀令」「皇室服喪令」「皇室陵墓令」「登極令」などの皇室の令が、特にそれぞれの附式で、儀式の手順を詳細に定めていた。今年の大嘗祭は、伝統的な行事として大きく紹介されていた。しかし、明治維新

に大変更が起こった。例えば、天皇の喪儀を取ってみると、孝明天皇代までの江戸時代の天皇の喪儀が仏教方式で行なわれていたのを廃止して、神道方式を採用した。大正と昭和両天皇の即位儀礼は神道の皇室令に基づいて行なわれたのは平常のことだが、現憲法下では、公的儀式として行なわれれば、政教分離の原則に違反しないように注意しなければならない。現在までのところ、この二つの儀式の内容や、手順を定めた法律は成立しておらず、本来、代替わりが現実となる前に、国会で十分な議論をした上で、立法しておくべきものであった。

しかし、1947年の宮内府依命通牒により、日本国憲法施行のときから、皇室祭祀や皇室儀式は旧皇室令に基づいて行なわれてきている上に、皇室典範に規定する以外の代替わり儀式も旧皇室令に基づいて行なわれるのでは、また、その中の神道式で行なわれる儀式のいくつかは公的儀式として行なわれるのではないかと、という点が心配されていた。また、皇室典範が規定する二つの儀式も、神道色の強いものとして行なわれるのではないかと疑問もあった。

そして政府は、これらの点について「憲法の趣旨に沿い、かつ皇室の伝統等を尊重したものになる」と述べ、その具体的な内容については一切明らかにしなかった。

伝統の原則に基づいて行なわれる即位儀礼なのに登極令により伝統でない要素がいくつかある。―― 歴史的には、大嘗祭は仲冬（旧暦十一月）下の卯の日に行なうこととされていたが、仲冬に行なうのはその年の新穀を用いるためであるということ。

―― 前天皇死亡によるの即位の場合には、諱闇が明けてからとされてきたということ。

―― 通常、大嘗祭は即位儀とは別の時期に行なわれており、連続して行なわれることとされたのは明治時代に制定された登極令からであるということ。

- ―― 庭積机代物を献納すること
- ―― 首都でないとところで挙行されること
- ―― 御禊行幸を行なわないこと
- ―― 皇后の拝礼のあること
- ―― 大饗が大嘗祭とならう独自の行事となったこと
- ―― 神宮等の親謁が行なわれること

登極令や旧憲法下の大嘗祭の実態は必ずしも伝統に基づいていないことがわかる。大嘗祭の二百二に十一年間の中継の間、それでも各天皇は全認されてきた。岡田精司によると、「半帝」と呼ばれた唯一の天皇は即位の礼も大嘗祭も行なわない仲恭天皇である。いずれにせよ、大嘗祭が天皇の即位儀礼として不可欠の儀式でなかったことだけは確かである。

憲法上で、「世襲」というのは、皇位継承の方法を定めたものに過ぎず、「世襲」であることを理由に、伝統的、歴史的天皇に認められていたことがすべて容認されているこ

とには毛頭ない。しがつて、世襲制は、憲法上認められない行為に「公的性格」を付与する根拠となりえない。同様に、それは内閣総理大臣等が公人として参加することを根拠づけることもできないのである。

けれども、実際には、すでに行なわれた「賢所に期日奉告の儀」には、宮内庁長官名の招待状によって、海部首相・田村衆院議長・土屋参院議長・矢口最高裁判長官らが「公人としての立場」で出席した。

また、90年三月八日付で、宮内庁は、首都府県知事宛てに、大嘗祭に献納する特産品の推薦を依頼しているが、これも大嘗祭に対する、国および地方自治体の過度のかかわりと言わねばならない。全国の自治体から問い合わせが相次いだ。「政教分離についてどう考えたらいいのか」「議会の追及に備えて想定問答集を考えて欲しい。」宮内庁はあこれらの件に対しては斉田の地方に選ばれた際、知事宛てに電話と文書で決定を伝えただけ、その後は、農協とじかに折働した、という。しかし、実際には電話連絡の数日後、秋田県の幹部数人が宮内庁に呼ばれて上京していた。「県には迷惑をかけませんから」と繰り返され、収穫儀式の「斉田抜穂の儀」の式次第の案などについて説明を続けた。

大分県の市民グループは「県幹部の抜穂の儀への出席は憲法違反で、公費支出は不当だ」と、当日の日当の返還と大嘗祭関連儀式への参列を差し止める監査請求を出した。大嘗祭の悠紀・主基両殿の供饌の儀にも一部の知事や、民社を除く各野党が参列を取り止めた。

社会党の土井（元）委員長は「私的な性格の皇室行事でしょ。これに国がかかうことは憲法の国民主権、政教分離の原則に反します。」と話した。

公明党は「党としては参加しない。個人参加は本人の判断」という意見が発表された。

民社党は「特別な感慨はない。でも、一生に一度、出られるかどうかの祭りだからね」という出席の説明が書記長から来た。

共産党が抗議して出席しないのは言うまでもない。

全国四十七都道府県議会議長と知事が自治体の代表として招かれたが、このうちの三割以上が欠席し。

野党だけではなくて、大嘗祭前と大嘗祭際中、全国で様々な形で不満が表明された。京都市で行なった日本基督教団京都教区の牧師、信徒八人のハンストから過激派ゲリラの反皇室闘争の行為までに分類される。

毎年行なわれている新嘗祭が宗教的であることから、皇室の私事として、内廷費の支出によって行なわれていることと比べれば、大嘗祭は高度に宗教的であることが明らかである。「一連の儀式、行事は皇室神道の宗教色が明白で、国費支出は憲法の政教分離の原則に反する」との訴訟が多かった。即位儀礼の予算総額約81億円のうち、大嘗祭は宮廷費か25億6千万円かかった。それは年間に天皇一家が日常生活に使われる内廷費（'90年度で2億9千万円）の九倍近い。「大嘗祭が神道儀式なのに公的行事として多額の税金を支出

のはおかしい、神道国家ではない」と訴えたプラカードも色々な市の繁華街でも見られた。

大嘗祭と天皇制

大嘗祭と、一般的に、即位儀礼の際は、天皇制そのものはよく問い直されたようである。過激の意見もあれば、天皇制の変わってきた性格を表現する穏健な意見もある。

アリトテレスの「君主の大権が制限されるほど、君主の権威は無傷で存続される」という格言に基づいて、京大教授、同人文科学研究所所長の上山春平はソフト天皇制の理論を発表する。現行の昭和憲法下の天皇制はこうした伝統を継承するという条件を満足させる。今日の天皇は「国政に関する権能」はない。結果は日本は君主制ではない。これは日本しかない場合で、議会制デモクラシーを国政の根幹とする点で、デモクラシーと君主制の混合体制と見るべきではないだろうか。この体制のもとで、世襲の君主制は、国家の頂点に、泥にまみれやすい政治家たちの立ち入りを許さぬ聖域を設ける役割を果たしている。この聖域の非権力化に、天皇制本来の伝統を見る。奈良時代や明治憲法時代以外、独自の日本文明を開花させ成熟させた京都首都時代には、極度にソフトナスタイルが主流をなしている。こうしたソフトな天皇制は、新時代にふさわしい再生である。

一方、厳重な天皇制の反対する声声の代表する網野善彦の理論も紹介する。

網野善彦の理論では、大嘗祭は直接に日本の社会に起こる差別に結ばれている。

それによると、1) 大嘗祭の本質を葬式儀礼であるモガリの儀礼と結びつけた天皇霊の継承は、「タマ祭り」によって粉飾、隠蔽されたのが律令制に規定された。

2) 大嘗祭のタマ祭りからイネの祭りへの変身の背景として、日本の「未開」の社会に高度に文明的な中国大陸の律令制と組織された世界宗教としての仏教が受容されることによって、最初の国家が形成された。

3) このような隠蔽の作用は、女性、職能者、非人などの社会的弱者が宗教集団として「血の原理」により組織化されるのを、上層階級が弾圧する過程を隠蔽したと理解できる。

その理論を証明する展開は山折哲雄と網野善彦はこう解説する。

まず、大権としての条件となるものには、三があると言える。それらは、カリスマ性、血の原理、霊の原理である。

大嘗祭による「天皇霊の継承の非断絶性」のフィクション性ができあがった。千三百年にわたり、権威の衰弱、転落にもかかわらず、そのフィクション性は、断絶されたことがなかった。

大嘗祭の本来の姿はモガリの儀礼の部分だった。モガリは心理的にも、政治的にも、大切な役割を演じる。というのは死とケガレに対する怖れが招魂の儀によって回避されるし

、王位の継承者がきめられない時、遺体の埋葬をしばらく猶予する。それによって、王位の中継という危機な状態をうまく回避できる。霊威の継承を認めながら、代々の天皇の体に内在する霊威が先王の遺体から新しい天皇の体に漂着することになる。

モガリの意義：生理的な死と社会的な死という二重の概念が前提となる。従って、霊威の転生に基づく王位の継承を可能にする。それは王権の「空位」状態を回避するとともに、魂の転移を促進して、新しい天皇の正当性は問題として取り上げられないことを可能にする。モガリ宮はその霊威転換の場所であると同時に、大嘗祭の舞台でもある。大嘗祭は古い天皇の埋葬と新しい天皇の誕生を告げる、一続きの儀礼である。「大嘗祭の本来の姿は葬送儀礼と直接結び付いている。死の儀礼である葬式と切り離してしまうと、その本質は隠蔽され、その存在意義を喪失せざるをえないことになる。」

死のケガレの「踐祚」と浄め野だ大嘗祭の分離という気がする。天皇の即位は七月以前だったら、大嘗祭はその年の十一月に行なわれる。八月以降だったら、大嘗祭は翌年の十一月におこなわれる。分離され、ケガレの中で行なわれる大嘗祭と浄めの中で行なわれる大嘗祭の二つである。

そのように、本の大嘗祭の性格の失いのプロセスはこのようになった。

- 1) 天皇霊の継承という秘儀的な側面が隠されること。
- 2) 収穫儀礼の側面が表面に強調されることで、イネ祭りの要因が浮上する。
- 3) 新嘗祭との関係の中に位置づけられ、葬式との関係については語られなくなった。

結局、新嘗祭と統合され、タマ祭りとしての大嘗祭がイネ祭りとしての大嘗祭へと轉身をとげた姿が見られる。

大嘗祭、そして大嘗祭の密議がイネに関する祭儀によって、タマ祭りの性格が覆い隠されてしまった。日本の天皇制における王権の継承が靈魂の転生によって保証される。結局と言うなら、大嘗祭は天皇制の「血の原理」の隠蔽のドラマであると言えよう。

1990年11月の明仁天皇の即位儀礼に含まれた大嘗祭は、日本人に再び天皇・皇室に対する興味を呼び起こした。大嘗祭の問題は日常生活から遠く離れていて、大昔の記憶が現代に浮かび上がったことであろう。大部分の若い日本人は「大嘗祭」という言葉を初めて耳にするが、その行事をめぐる議論が彼(女)らの記憶の中にどれくらい残ると疑わしい。将来、大嘗祭どうなるか。宗教界と専門家を除いて、ますます興味を持たれなくなるか。いわゆる本来の意義が失われた、化石化した儀礼になるだろうか。象徴天皇の「象徴」というわくを越えた越権行為に反対する世論の前に大嘗祭がなくなってしまうだろうか。